

<h1>互生共環</h1>	No.48	編集発行人
	2016.08.10	〒 189-0013 東京都東村山市栄町 2-23-4-401 東條栄喜 E-mail: eiki.tojyo@tbr.t-com.ne.jp

目 次

巻頭言 共通性と同一性を区別しよう	- 2 -
——比較思想論における一概念分析——	
東西の自然概念と安藤昌益の自然概念	- 3 -
—— 共通性・異質性・可変性の多相認識が必要 ——	
始めに一両者の対比における不毛な諸議論	
§ 1 自然＝天地万物の語義は中国中世から始まる	
§ 2 昌益の自然概念は天地万物を含む運動概念	
§ 3 東西の自然概念に共通性と異質性の両面理解を	
§ 4 多義的自然概念の多様な潜在的展開可能性	
終りに一単純な比較論でなく現代的寄与へ	
「安平」「直耕」思想確立への内因と外因	- 12 -
——根源志向精神と典籍の批判的摂取と凶作飢饉環境——	
§ 1 先行典籍からの主体的選択吸収と環境的外因	
§ 2 『文韜』批判から治乱否定の「安平」思想へ	
§ 3 西川如見の天地直道・農人論から「直耕」思想へ	
§ 4 凶作飢饉体験は幕藩体制否定の外因として作用	
書評：山崎庸男著『安藤昌益の実像 近代的視点を超えて』	- 17 -
1) 新たに開拓した側面	
2) 大きく後退した側面	
3) 研究の欠落した側面	
4) 総観—実像未だ遠し	
放談室	- 21 -
* 文化圏類学思考の有用性	
* 屋久島で昌益の社会思想を考える	
* 昌益研究者の諸類型	
編集後記	- 23 -

〈巻頭言〉 共通性と同一性を区別しよう

——比較思想論における一概念分析——

(1) 東西の自然概念の異同をめぐる議論の混迷

最近数年間に、昌益の自然概念と近代の自然界概念の異同についての議論が多少行われるようになった。当編集者も其の当事者の一人であるが、どうも議論が一向にかみ合わず、視野の狭い不毛な論断が横行しているように見受けられる。その論点は、安藤昌益全集の監修者・寺尾五郎氏（故人）の提起した「（昌益の自然概念は）日本思想史における自然界の意の「自然」概念の初出であり、創造であった。」（『「自然」概念の形成史』222頁）という見解の是非をめぐるものである。当編集者は付帯意見付きで、この見解を支持する者であるが、昌益研究者の中にはこの見解が誤りだと論断する向きもある。昌益の意図する「自然」は五行の有機的自己運動の様相をさすもので、人間と対比される客観世界としての「自然界」ではない、として寺尾説を批判するのである。寺尾氏による昌益の「自然」概念の理解は現在、必ずしも昌益研究・思想史研究界の広い支持を得ているわけではない。多くの研究者は“寺尾氏は一つの典型的見方を提起した”くらいにしか受け止めていないのではないか。ところがこれを批判する研究者は、寺尾説が既に昌益研究界で確固として定説化したものと錯覚し、それは全くの誤りだと論断する。当編集者はこの現状認識の誤りに加えて、視野の狭い論断の仕方に大きな問題を感じる。

(2) 共通性と同一性の区別が必要

当編集者はこの件に関して、一つ重要な事に気付いた。それは昌益の自然概念と近代自然界概念の比較に際して、論者たちが“共通性と同一性の概念的区別”が出来ていない、という点である。一般にA概念とB概念に、ある種の共通項・共通性があっても、両者は同一・同等とまでは言い切れない—それぞれがほかに別の存立要素を含んでいる可能性があるからだ。昌益の思想も含めて漢字文化圏の「自然」の語義が、その多義性の一部として天地万物の意味にも受け取れる意味を、未分化のうちに含むようになってからは（＝中国では魏晋時代から、日本では近世から）、これを近代自然界概念に通ずるものとして理解する向きが生まれた。しかし漢字文化圏の「自然」概念には「天地万物」以外に無作為状態概念・理則的概念・根源存在的概念なども混在しているから、西欧近代の自然界概念とすべて同等・同一と云うわけにはいかない。共通項があっても両者が同一だとまでは言えないのだ。加えて漢字文化圏の「自然」概念では、天地万物と人間活動を必ずしも対立的には捉えず、調和的に見る場合が多い。

こうした点を考慮して、昌益の「自然」概念と近代自然界概念を比較すれば、両者が全く別物だとか、逆に全く同等だといった議論がいかにも不毛であるかが分かる。当編集者は20年前から、昌益が「自然」の語を名詞形と動詞形で両様の用いている点を重視して、こうした二極分解的な理解の双方に批判的論述を行ってきた。昌益の提起した「自然」概念には近代自然界概念に通ずる側面もあれば、現代の自己生成的自然概念にも通ずる側面もある、という多面的理解が最も妥当だと考えられるのである。

ところが、共通性と同一性を区別しない論者は、昌益の自然概念と近代自然界概念に共通性があれば、それは両者の同一性・同等性を意味するとして否定する側にまわることになる。

(3) 漢字文化圏・多義的自然概念の諸側面

漢字文化圏における自然概念は、中国古代の“自ずから然り”の無作為概念が魏晋以後の中世になると多義的展開（実在物・理則・根源等の意）を進めて、それがまた新たな可変性を内包するようになった。こうした背景があったからこそ、幕末から明治初期にかけて、その一側面である天地万物の意味がnatureの語に当てられ、「自然」の訳語が定着しえたという事ができる。伝統用語の「自然」が、このように多義性・可変性を持っているが故に、それはまた現代の自己生成的自然観に対しても通用する柔軟性をもつと言えるのではないか。以上の論点についての詳細は本号掲載の論考本文で記述したい。

東西の自然概念と安藤昌益の自然概念

——共通性・異質性・可変性の多相認識が必要——

始めに——両者の対比における不毛な諸議論

最近の十数年間に、安藤昌益の自然概念と西欧近代の nature(自然界)概念の異同をめぐって、議論が起こっている。両者に共通性を見出し、その意義を強調し出したのは安藤昌益全集の監修者・寺尾五郎氏(1923-1999)である。一方、これとは若干ニュアンスが異なるが、科学史・比較思想の分野から昌益の自然概念が西欧近代の自然界概念に接近した水準に達したとして高く評価したのが伊東俊太郎氏である。両者はそれぞれ、『「自然」概念の形成史』(2002 寺尾五郎・遺著)、『一語の辞典 自然』(1999 伊東俊太郎)などの論著でこの事を繰り返し強調している。当編集者は一定の留保付きで、この見解を支持する論考を既に二十年前から出している。最近では中国の研究者にも漢字文化圏において、魏晉時代から「自然」の語義に天地万物の意味が未分化のうちに多義的に生まれたことを重視する論考が見られるようになった。

これに対して、1976年の時点で昌益の自然概念は〈^{ひと}自^すり然る〉運動概念であり、自然界概念ではないと強調したのが安永寿延氏(1929-1997)であった。そしてこの理解に近い一部昌益研究者の側から、最近十数年間に、昌益の自然概念は有機的世界の運動を意味するとして寺尾説批判を兼ねた立論も出されるようになった。

しかしこの二つの論調は相互にかみ合わず、寺尾説を批判する論者は専ら有機的運動を意味する昌益の記述部分を引用して、昌益の自然概念は近代自然界概念ではない、誤りだというだけである。ここには、昌益自身による「天地は自然の全体である」(私法仏書巻)という記述には目をつぶり、自説に都合のよい部分だけを引用する恣意性を見出さないわけにはいかない。別な言い方をすれば、これらの論者は昌益の「天地=自然の全体」を認めると、それが即、近代自然観の機械論・要素論的内容も認める事になるとして、否定するものと解される。だが「自然=天地」(=実在物総体)の語義を認めたからと云って、それが即、近代自然界概念と同一という事にはならない。つまりは両概念に天地万物の意味での共通性があっても、両者がすべての面で同一・同等とまでは言えない、という区別と論理展開がでないために、こうした二極分解・二律背反的な理解に留まって不毛な立論を続けているという他ない。共通性と同一性の概念的区別が出来ていないのである。

§ 1 自然=天地万物の語義は中国中世に始まる

以上のような、不毛な立論を克服するため、ここではひとまず迂回して、漢字文化圏での自然概念の歴史を概括しておこう。

(1) 漢字文化圏の自然概念の多義的展開と天地の語義生成

「自然」の語は、『老子』や『莊子』の典籍に於いては殆どが「自ずから然り」の無作為状態概念だったと云えよう。ところが、時代を下って魏晉南北朝時代以後は多様な展開を遂げるようになった。筆者が見出した「自然」の語義としては、それまでの無作為概念に加えて根源的存在概念・生成原理的概念・天地万物概念などがある。これらが未分化の内に、多義的に用いられている。その事例を幾つか挙げて置こうと思う。孰れの用例も品詞的には自然の語を名詞として用いている。

まず根源的存在或いは生成原理の語義としての用例として、次のような事例を見出した。

「自然者、道德之常、天地之綱也。」 (道蔵・宗玄先生玄綱論)

「自然者、道之真也。人為道能自然者、故道可得而通。」 (道蔵・無上秘要・入自然品)

「自然者、道之父母、氣之根本也。」

(雲笈七籤・元炁論)

「自然者、重玄之極道也。」

(成玄英・道德經義疏)

「自然者、無称之言、究極之辞也。」

(王弼：老子注)

次いで筆者は、自然の語が天地万物を指す語義として、以下のような用例を見出した。

「天地、含氣之自然也。」

(王充：論衡・談天)

「天地生於自然、萬物生於天地。自然者無外、故天地名焉。」

(阮籍：達莊論)

「自然生太極、太極生天地、天地生陰陽、陰陽生萬物。」

(道藏・道德真經儀)

「天者、自然之稱也。運者、轉之不足也。」

(道藏・南華邈・天運篇)

「自然者天地、主持者人。」

(王船山・周易外伝)

上例で漢代の典籍『論衡』からの一例は、王充が天地と自然を等置的に論じた唯一のもので、「自然篇」その他で用いた用例はすべて「自ずから然り」の語義と言って良いと思われる。「自然」の語が天地万物をも語義に含むように用いられるようになったのは、実質的には魏晋時代以後と言って良い。ともかくこうして中国では中世に入って、自然の語が天地万物を指す用法も、他の語義と未分化の状態ながら生まれた事が確認されるのである。但し、こうした用法は自然の用語例の全体の中では比率的に低く、同一思想家に限定しても、それほど高くは無い。

ともかく、中国思想史の史的展開の中では、もはや自然の語を一つ覚える的に「自ずから然り」＝自然性の無作為状態概念としてのみ理解するのは不適當な事が明白である。

(2) 中国での「自然＝天地」の語義はしかし、天人合一観と共にある

しかしながら同時に、「自然＝天地」の語義は、漢字文化圏では殆どの場合に天人合一の世界観と密接不離に成り立っていて、環境・外界と人間を調和的に捉えるので、自然環境と人間を対立させ、人間が外界環境を管理変革する対象と見なす近代自然観とは当然、違う側面を持つ。天人合一説に対して荀子のように「天人相分」説を主張したのは例外に属するであろう。(安藤昌益の「転人一和」論も大きな区分けでは天人合一説の系譜に属すると云えよう。)

更に漢字文化圏の自然観は、五行の循環運動により天地が成り立つと見なす点でも、要素論的・力学的立場に立つ近代自然観とは違った性格を持つ。

このように、漢字文化圏の自然概念は近代自然概念と自然＝天地万物＝実在総体の語義の面では共通性を持ち得るが、上記の二つの側面では明確な違いも有している。従って、中国の中世以後の自然概念は西欧近代の自然概念と比較すると、天地万物＝実在物総体の意味も未分化で内包しているが故に、一面では共通性を有するが、他方では天人合一・五行環節の側面では大きく異なる性格を持つ、という両面認識が必要になる。

(3) 中国文学者による自然＝天地の語義生成の指摘

ここで東西自然概念の異同についての、中国文学者と中国哲学者・中国思想史学者の対照的な見解に触れておこうと思う。

まず、中国文学者の笠原仲二氏は1952年の時点で三篇の論考：「自・然」「天と自然」「自然と真偽」を相次いで発表した。いずれにも「中國古代に於ける自然概念とその内容の展開 (一)・(二)・(三)」と副題がついた一連の論考である。中国古代の自然概念の始まりを「自」「然」の字義から説き起こした後、天と自然の語が異語同義的に用いられた事例を挙げて次のように論を進めた。

「(漢代に到って) 今日我々が所謂自然界・自然現象として理解してゐる自然なる概念にそれが近いものをもってゐることを實證したが、(中略) 今日用ひられ觀念されてゐるような自然概念は、その

誕生への強い傾向性は認められるけれども未だ明確な形では成立してゐないことをひとは氣付くであらう。このような意味での自然概念の成立については（中略）魏晉の時代に待たねばならない。」

（「立命館文學」第 85 号（1952）41 頁）

しかしこの論考では魏晉時代で自然の語が、より明確に天地万物の实在総体を示す用例を必ずしも明示できていないが、当編集者は論旨には賛同している——自らその作業を進めた結果、同じ結論に達したためである。小尾郊一氏も著書『中国文学に現れた自然と自然観』（1962）で、この笠原氏の立論を支持している。笠原氏は後に、これらの論考も含めた著書『中國人の自然観と美意識』（1982）でも次のように述べている。

「自成的・自若(如)的自然一般が漠然指稱し、意味するものと考えられていた自然という文字が、そのような單なる抽象的・概念的なものから、漸く具象的にハッキリと草木鳥獸蟲魚等々、あるいは山水風月的な自然物・自然界などを意味する概念として規定されるような傾向——それは己述のように已に後漢の頃から見え始めていたものであるが——が、愈々明確になってきておることを注意すべきである。」

（『中國人の自然観と美意識』446 頁）

このように、中国文学者の中には二十世紀の半ばに、魏晉時代から自然＝天地万物を意味する語義が生まれた事を指摘し重視する立論があった。これは、漢字文化圏の自然の語にはそうした用法は無かったとする哲学者・三枝博音氏の見解（著書『日本の思想文化』などで主張）とは真逆の主張である。

どうしてこのような正反対の見解が生じているのか？ それは三枝氏の場合には主に、老莊思想の原典や浄土經典に出てくる自然概念だけを重視して、魏晉時代以後の道教思想その他に於ける自然の語法と概念展開を通時的にフォローすること無く断定したためだと言って良い。

（４）中国哲学・中国思想史学者による自然概念の議論

ところで、中国哲学者・中国思想史学者の側からは、漢字文化圏の自然概念について、改めて詳細な研究が為されている。内山俊彦・溝口雄三・池田知久といった代表的な学者から、それぞれの著書で中国の伝統的な自然概念のについての論及がなされているが、自然＝天地万物の語義での用例があることは一応認めるものの、あまり重要視されないように見受けられた。特に溝口雄三氏の場合は、次のように論じている。

「(自然の語に関して) 中国は早くから名詞形をもち、しかもそれは初発には天地万物のありようを示す語であったから、いわゆる自然界を指示するに似た用例があつて不思議はない(中略)。ただし、それに人間世界と対立的なあるいは弁別された領域、近代に自然科学を生み出したような対象化された領域としての意義を求めるならば、それは徒勞に終わるであろう。(中略) 天地万物の「自然」は中国人にとって人間を含んでのことであつたことに留意しておこう。」

（「中国の「自然」；『文学』第 55 卷(1987)第 6 号」97 頁）

溝口氏は中国の「自然」の語に天地万物の語意を持たせるケースを認めながらも、人間と対立する外界世界への対象化認識が無いという点で、東西の自然概念の決定的な違いの方を強調したわけである。

池田知久氏の論考「中国思想史における「自然」の誕生」（1993）、或いは大著『道家思想の研究—『莊子』を中心として』（2009）では、かなり細かく自然概念の生成と展開に関して多くの事例を分析したが、主に漢代以前を扱っている事もあつて、こうした方面への問題意識自体が稀薄なように見受けられる。同じく漢代以前を研究対象としているが、これとは対照的な論調を採るのが内山俊彦氏の著書『中国古代思想史における自然認識』（1987）で、次のように主張している。

「中國の傳統的用語としての「自然」は、文字どおり、おのずからなること、おのずからしかること（非作爲）を意味するものであり、主として、道家やその影響を受けた思想家によって（いばしば「無

爲」の概念と結合されて) 使用される概念であるところ、いうまでもない。したがってこの概念が、natureの意味での自然と等しくないことは明らかである。しかしまたこの概念は後者の意味でのそれと重なる場合もあり、「自然」の語義が非作為を表す以上當然にも)、よって、自然認識の考察に当たっても無視されてはならない。」(『中国古代思想史における自然認識』16-17頁)

この書は中国の戦国期から前漢までの自然概念を扱っているが、もし魏晋時代までを対象化すれば、先に述べた中国文学者たちの見解と共通する論展がありうるのではないか。「非作為」の自然概念は必然的に、作為でないもの→実在物→自然界へと繋がっていくからである。natureの意味での自然と「等しく」はないが「重なる」場合もあると示唆している点は、卓見だと思われる。

§ 2 昌益の自然概念は天地万物を含む運動概念

(1) 昌益は多相的に自然概念を定義しているが、多元的ではない

ここでおさらいを兼ねて、昌益の自然概念を幾つか取り上げ、その定義的記述から整理しておきたい。昌益は自然とは何か、という問いかけを自分自身に課して、簡潔に自答している。

- 「自然とは真の言なり」 (確龍先生韻経書) → 自然=真(根源実体)の存在概念
- 「自然の全体は無始無終の転定」 (私法仏書卷) → 全自然=天地の常在概念
- 「自然と転定と同自なり」 (統・万国卷) → 自然=天地の簡言
- 「自然とは五行の尊号」 (私法仏書卷ほか) → 自然=五行=循環結節概念
- 「自然とは互性妙道の号なり」 (大序卷) → 和合的矛盾の運動法則概念
- 「自然とは自り然るを謂う」 (刊・卷一) → 自然=自律自生の運動概念

いずれも、極めて短い文言で様々な視点・側面から自然概念を定義している。自然とは根元を言えば「(活)真」の運動そのものであり、「全体」を言えば天地そのものであり、基本構成論的に言えば五行(四行)の運動にほかならず、矛盾論的に言えば和合的矛盾の運動体であり、他者によらない自動運動そのものである。

このように、きわめて簡潔な表現で自然を定義しているという事は、それ自体が昌益の自然論の特徴でもあり、それだけ日常的に深く自然概念について考究したが故にこうした簡潔な命題に実を結んだと見てよい。そうでなければ考察が浅い分だけ多くの修飾句を重ねた、くどい表現での自然記述となるであろう。(昌益の研究者の一部には、こうした自然概念の解説に当たって、やたらと長文の引用をして、結果的にその一部面だけを強調する向きもあるが、あまり感心できない。)

そしてこれらの定義的命題が多元的に提起されているのではなく、すべて連環の中で多相的に論じられている事にも留意したい。此の点については、当編集者は自著その他で既にたびたび論じてきたので、ここでは指摘だけに留めおきたい。

(2) 昌益の自然概念は天地の実体と五行の運動を統一している

これらの定義から、天地の存在と五行運動が二つの別個な存在で無く、自然のあり方として一体である事を上記の引例は多様な表現で示していると謂えよう。昌益にとって「自然の全体」=「転定」(天地)という規定と「自然」=「五行の尊号」という規定は背反せず、また別個の関係でもない。一方は自然を総体的に捉えた表現であり、他方は自然を構成論的に捉えた表現であって、両者は自然の両側面でもある。此の事を了解しない一部の論者は、昌益の言う自然とは五行の繰り広げる有機的運動を強調するだけで、近代自然界概念に通じる天地万物の意味の方を意図的に否定したがる傾向がある。

だが「自然の全体」＝天地の規定が近代自然界概念に通じると言っても、それは機械論的な自然界概念を意味しない。昌益のいう「転定」は生生運動の最中にある天地万物であり、西欧近代の天地観は機械論的に把握され、而も人間の支配・管理の対象としての自然界である。此の事はいちいち断るまでもない相違点なのだが、こうした論者は、昌益の自然概念と近代 nature 概念に天地万物＝実在物総体としても共通性がある事を一度認めると、両者がすべての面で一致したと認める事になると早合点して、猛烈に反対するわけである。一つの側面で共通することがあるからと云って、他のすべての側面で、両者がなんでも一致するわけではない、という一般的論理を持たないと、両者には全く別物か全く同一かの二者択一・二律背反的な選択枝しか持てなくなる。

従って、こうした論者は必然的に、昌益の「自然の全体」＝天地の規定には触れたがらず、五行による有機的運動の側面だけを意図的に強調して、それは近代自然界概念とは異なる、と云う他なくなるわけである——要は、昌益の自然概念と近代 nature 概念の背景には物活論と機械論、天人調和と天人対立の観点の違いはあるが、両者が天地万物＝実在物総体の意味を内包している点では共通項を持っている、という点を無視してはいけない、という事だ。この共通点と相違点の両面認識がないと、不毛な議論が今後も繰り返される事となる。この問題については次節でも改めて論じる事にしたい。

(3) 「転人一和」の自然概念は現代自然観にも通じる側面がある

昌益の自然概念が天地万物を内包することから、近代自然界概念と通じ合う側面ばかり論じたが、一方でその生生自動の運動概念は（近代の機械的・要素的・力学的自然観の超克としての）現代の自己生成・自己組織自然観にも通じる側面があると言って良いのではないか。他者・造物主による運動の創造・万物生成を否定し、「活真」の「自行」＝自律運動自体がすべての存在物を生み出しているとする生動的自然概念は、実在物をすべて運動過程の中で捉えている。

昌益の自然概念では運動と実体、過程と実在は二項対立ではなく、その両面である。此の事は昌益が自然の語を動詞形と名詞形に両用している事とも深く関わっていると云えよう。（もちろん、その他に同時代の他の思想家と同様に、通常の形容詞的・副詞的用法を採る場合もあるが。）

現代の自然観と比較して、基本的観点で足りない点があるとすれば、昌益の自然概念では自然史的・進化的観点がないという一点であろう。五行（晩期には四行）と三回＝通横逆の繰り返し広げるすべての運動は、不断の循環運動を層次的・立体的に構成しているが、そこには自然界の時間的進化・時間発展の観点が見られない。

だが自然の自己生成能力と転体－地球－央土－万物といった層次構造認識、央土での転気と定気の交感作用による万物生成論を素朴ながら有している事から、昌益の自然概念には現代的自然観にも通じる側面を見出さないわけには行かないのである。

(4) 寺尾氏の「昌益の自然＝自然界」説の正しい理解に向けて

本節での最後に、寺尾五郎氏による「(昌益の自然概念は) 日本思想史上における自然界の意の「自然」概念の初出であり、創造であった。」(『「自然」概念の形成史』222 頁) の意味する事について補足説明をしておこうと思う。こうした規定に反対する論者はきまって、昌益の言う自然とは人間も含めた、五行による有機的運動だから、対象化された「自然界」を意味しない、といった趣旨の主張をしてくる。

この場合、いま引用した寺尾氏の主張だけを見ていると、確かに説明不足の面がある事は否めない。だが実際には、寺尾氏も昌益の自然概念と近代自然界概念が完全に一致しているとまで言い切っているわけではない。その証拠として、同氏が監修した『安藤昌益全集』の別巻「安藤昌益事典」で取り上げられた「自然」の項目を見ると冒頭に、「(自然とは) 人間をふくむ客観的世界のこと。」と書きながら

も、人間の主観を越えた「自り然る自己運動」の過程と様相が昌益の言う自然なのだと解説している。更に、昌益の自然観の特徴として物質性・運動性・矛盾性・生命性・主体性（＝自律性）の五点を挙げている。すなわち、昌益の自然概念に天地万物の客観世界を認めると同時に、自律的生命運動性をも認めているので、近代自然界概念の方だけに引き寄せて両者を同一と言っているのではないことが分かる。天地万物という客観世界を共通項として持ちながらも、昌益の自然概念が近代自然概念よりも遥かに自律的生命運動性をもつと指摘している事にもなるであろう。これを当編集者の語法で言えば、寺尾氏は昌益の自然概念に近代自然界概念と共通性を見出すと共に、また漢字文化圏での独自性をも指摘していると言ってよい。こうした側面を総合的に捉えずに、共通性＝同一性と早合点して寺尾説は誤りだと偏狭な決めつけをしても、何の生産的意義も生まれまいであろう。

§ 3 東西の自然概念に共通性と異質性の両面理解を

(1) 自然＝天地万物の語義は東西双方で独立に成立した

§ 1 で示したように、漢字文化圏においては中国の魏晋時代から、具体的に自然の語が天地万物を表すような用法が、他の語義と未分化ながら生まれた。用例としては少ないながらも、こうした語義が後代にも引き継がれていった。

従って、西欧近代の *nature* 概念とも一面で通じ合う、天地万物の語義は漢字文化圏でも独立に展開してきたとみてよい。昌益の自然概念も、こうした背景の中で、より鮮明に確立したと言えるであろう。但しこの場合、昌益がそうした先行典籍での自然の語の用例を目的意識的にフォローしたとまでは言い切れない。昌益が思想形成上、一定の影響を受けたと見られる西川如見の著書『日本水土考』『町人囊』には、「自然の風水」「水土自然」「自然の形状」「自然の神徳」「天理自然」「自然のいきおい」「自然の理」「自然の妙」等々と云った表現がかなり多くみられる。こうした連語には自然の語を名詞的に理解できるものが多く、昌益の自然概念確立への有意な作用を果たした可能性も考慮しておきたい。

当編集者が近世日本の思想家について探索したところでは、昌益の思想形成に直接かかわりはないと見られるが、山鹿素行(1622-1685)、伊藤仁斎(1627-1705)、浅見綱斎(1652-1711)、大原幽学(1797-1858)の著作に見える自然の語法には、自然=実在と等置できる語法もかなり見受けられた。(既に一度論稿に纏めてあるので、ここでは再論をしない——本稿末尾の文献リスト・当編集者分の論考で扱った。)

要は、安藤昌益ほどでなくても、他の近世思想家にも自然の語を常態概念の形容詞・副詞としてでなく名詞的に用いた用例はそれなりにあり、天地万物の語義に近い用法が未分化のうちに育まれていったという持方も成り立つであろう。

(2) 共通点と相違点の両面認識の重要性

これまでの東西自然観の対比における、単純な(同一か別物かと言った)相違論を排して、中国中世から自然概念の多義的展開の中に天地万物＝実在物総体の語義も生まれだしたことを正当に認識し、共通性と異質性の両面認識を持つ事が必要だと考えられる。昌益の自然概念も漢字文化圏での内発的展開として、天地万物の実在世界を活真の生生運動において包括的に把握している。

下表にその概略を取りまとめた。細かい事を書き出すと、表が複雑化するので極めて荒っぽい整理にした。本質的な事だけに限定した方が論旨は理解されやすいものと思う。なお漢字文化圏では英語の場合と違って、自然の一語が接尾辞なしに名詞・形容詞・動詞・副詞と多様に機能する分だけ、語義も多様化する一要因となっているとも云えるのではないか。

なお当編集者の調査研究結果によれば、漢字文化圏では自然の語を動詞的に読んだ例は昌益以外にも親鸞・大原幽学などにみられる。

		西欧近代の nature 概念	漢字文化圏の自然概念	安藤昌益の自然概念
共通点		天地万物(自然界)	中国中世以後は天地万物を指す場合もある	天地万物を含む
相異点	天人関係と世界観	天人対立 人間と独立の対象化世界 神の存在と機械論	天人合一 人間と自然の融合(未分化) 物活論 / 太極論	転人一和 人間直耕は転定直耕の継続 物活論 / 活真論
品詞区分		名詞	形容詞・副詞・名詞	名詞・動詞・形容詞・副詞

(3) 有機体自然観との共通性の側面にも留意を

これまで、西欧近代の自然概念は人間と対立する自然界概念だとして論を進めてきた。これはしかし、西欧にはそれしかなかったという事ではなく、近代科学の成立と共に支配的だったのが機械論的自然観と裏腹の自然界概念だと言う意味で重視しただけの事である。思想の分野ではシェリング、カント、ヘーゲルなどに代表されるような有機体的自然概念を發揚した思想家も輩出したことを忘れてはならないと思う。そして実際に西川富雄氏や松山壽一氏などは、こうした側面で昌益の自然概念とシェリングの自然概念に共通性を見出している。

この事態は一見したところ、これまで述べてきた天地万物の語義の故に近代自然界概念との共通性を指摘した事と矛盾すると思われるかも知れない。しかし上表からも分かるように、当編集者はもともと機械論のもとでの近代自然界概念と、物活論の伝統下での自然＝天地万物の語義との限定的共通性を取り上げてきただけなので、有機体自然概念の側面での共通性もまた、一方で成り立っても、何の不思議もないと云えよう。この点は、昌益の自然概念と近代自然界概念の共通性を指摘した寺尾五郎氏の次の論述を見ても明らかである：

「(昌益の)「自然」は、巨大な天地とその間の万物の総体、宇宙と地上の全無機物界と、生きとし生ける有機生命との総体である。」
 (『安藤昌益の自然哲学と医学』12頁)

「自然は絶えざる運動の過程にあるが、それはたんなる物理的な移動・運回ではなく、生きた生成活動であり、生産労働であると昌益はいう。自然は生きて動いて働いており、自ら「直耕」し「自耕」する。昌益の「自然」とは主体的能動性すなわち生産性をもった活物である。」
 (『安藤昌益の自然哲学と医学』18頁)

この二つの引例のうち、最初の方は全自然を無機物界と有機物界に二分して (=近代科学的発想が混在)、表現上は不適切さを感じるが、あとの引例では全自然を「主体的能動性」をもった「活物」と表現しているから、まさにシェリングやヘーゲルの有機体自然観との共通性も伺える観点である。当編集者の場合は、これを現代の自己生成的・自己組織的自然観にも通じるという表現で指摘してきた。

このように、昌益の自然概念が天地万物を含む側面からは自然界概念と共通性をもつ一方で、物活論の思想伝統のもとで自己生成活動性を措定する側面からは、有機体自然観との共通性を持つという両面

認識が必要であろう。従って、一部の昌益研究者による、自然界概念との昌益自然概念の共通性だけを批判の標的にして、それを誤りだと決めつける論調は、大変矮小化された議論になるほか無い。そうした論者自身の視野の狭さを自己暴露していると言うほか無い。

§ 4 多義的自然概念の多様な潜在的展開可能性

(1) 漢字文化圏自然概念の持つ多義性の豊かな可能性

ここで改めて、漢字文化圏の自然概念の多義的展開の持つ、様々な可能性について言及しておきたい。自然概念が多義性をもつと言うことは、特定の時代の限定的な自然概念(=その典型が近代自然界概念)に通じる面があると言うに限らず、別な側面にも又通じ合う事が出来るという多様性を秘めている事を意味する。

漢字文化圏では近代科学の展開と、それを支える機械論的世界観が生まれなかった分だけ、自然概念に関して未分化の内に多義的内容が形成され継承される事となった。自然界と人間が連続的・融合的であった事は、一面では特化されない曖昧さとして作用する一方、歴史的現在の環境破壊への反省と人間活動の望ましいあり方の面からは積極的に再評価されるという逆転を生んでいる。

此の点は西欧文化圏においても、機械的自然観の隆盛で一時的に隅に追いやられていたシェリング、カント、ヘーゲルの有機体的自然観の再評価が進み、更には二十世紀前半のベルグソン、ホワイトヘッドの自然思想・有機体哲学への繋がりとして見受けられる。ベルグソンは「持続」が生命の根源的実在と捉え、生成する持続によって、世界は創造的進化の過程にあると見なした。ホワイトヘッドは一般相対性理論の研究を経て、万物の存在を生成過程から捉え、過程と実在の根元的単位として **actual entity** (活動的実質・能動的実質などと邦訳されている) という概念を提起した——安藤昌益の「活真」との類似性を指摘する向きもある。

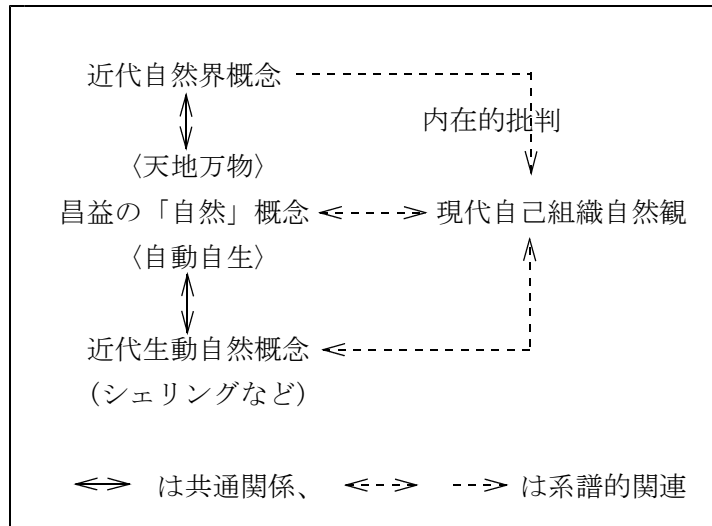
(2) 20世紀後半からの自己組織自然観の台頭

20世紀後半になると、プリゴジンによる自己組織化理論=非平衡開放系における秩序形成のシステム理論が展開され、その適用範囲が元々の熱力学の範囲から物質界・生命界・人間社会にまで広げられるようになった。これと相俟って非線形の相互作用を通じて発生する一連のカオス現象(収束・振動・回帰・分岐・無序化など)を解明する理論が発展し、併せて「複雑系の科学」を構成するようになった。混沌と秩序、揺らぎと安定の間で、自己形成を進める自然像が生まれている。

漢字文化圏で培われた多義的自然概念も、こうした自己生成的自然観の展開という新たな動向の中で、歴史的思想遺産としてその潜在的可能性を改めて見直されるべきかと思われる。

終りに —単純な比較論でなく現代的寄与へ

以上に述べてきた内容を図式化して下図に示した。簡略化した嫌いはあるが、主旨が伝われば幸いである。もはや昌益の自然概念を近代自然界概念との単純な同定・否定の二項対立で見ていくのではなく、どの側面がどのように対応関係にあるのかを、多相的に理解する方が生産的だと言えよう。そして過去の自然思想遺産を現代の自然観の展開に前向きに活かしていくという思考もまた望まれるところであろう。これは安藤昌益の自然概念に限らず、漢字文化圏の自然概念全般の多義性が有している潜在的可能性を未来に向けて活かしていく志向でもある。



〈 文献 〉

- 寺尾五郎：「自然」について；『直耕』創刊号（1988）；安藤昌益の会
 寺尾五郎：『「自然」概念の形成史 中国・日本・ヨーロッパ』（2002）；農文協
 伊東俊太郎：『一語の辞典 自然』（1999）；三省堂
 伊東俊太郎：『文明と自然—対立から統合へ—』（2002）；刀水書房
 林淑娟：新「自然」考；臺大中文學報 第31期（2009）；臺灣大学中國文学系
 趣芃：『道教自然観研究』（2007）；四川出版集团巴蜀書社
 樂愛国：『道教生態学』（2005）；社会科学文献出版社
 戴璉璋：阮籍的自然観；中国文哲研究集刊 第3期（1993）；中央研究院中國文哲研究所
 王中江主編：『中国観念史』（2005）；中州古籍出版社
 蒙培元：『人与自然—中国哲学生態観—』（2004）；人民出版社
 東條榮喜：漢字文化圏と安藤昌益の自然概念(1),(2)；『互生共環』No. 39, 40(2013)；私版
 東條榮喜：安藤昌益の循環思想と自然概念（湘南科学史懇話会報告）；『互生共環』No.41(2014)；私版
 笠原仲二：自・然 中國古代に於ける自然概念とその内容の展開(一)；立命館文學 第84號（1952）
 笠原仲二：天と自然 中國古代に於ける自然概念とその内容の展開(二)；立命館文學 第85號（1952）
 笠原仲二：自然と真偽 中國古代に於ける自然概念とその内容の展開(三)；立命館文學 第86號（1952）
 笠原仲二：『中國人の自然観と美意識』（1982）；創文社
 小尾郊一：『中国文学に現れた自然と自然観』（1962）；岩波書店
 室谷邦行：「自然」概念の成立について；『日本中國學會報』第四十集（1988）；日本中國學會
 池田知久：中国思想史における「自然」の誕生；『中国—社会と文化』第8号(1993)；中国社会文化学会
 池田知久：『道家思想の研究—『莊子』を中心として』（2009）；汲古書院
 溝口雄三：中国の「自然」；『文学』VOL.55(1987)；岩波書店
 内山俊彦：『中國古代思想史における自然認識』（1987）；創文社
 西川富雄：主体としての自然—シェリングと安藤昌益—；比較思想研究 第16号(1990)；比較思想学会
 西川富雄：安藤昌益における自然の概念；立命館大学人文科学研究所紀要 No.57（1993）
 松山壽一：昌益とシェリング—その自然と医の思想—；笠谷和比彦編『一八世紀日本の文化状況と国際環境』所収（2011）；思文閣出版
 小林道憲：『複雑系の哲学』（2007）；麗澤大学出版会

「安平」「直耕」思想確立への内因と外因 ——根源志向精神と典籍の批判的摂取と凶作飢饉環境——

始めに

安藤昌益の社会思想の根幹をなす平和思想と直耕思想については、既に多くの論考が出されており、いちいち取り上げるまでもないほどである。しかしそれらががどのような契機と背景で成立したかについては、現在も依然として解明が尽くされたとはいえない状況にある。思想内容は解明されたが成立過程の解明は未達成というほかない。本稿ではこの課題につき、2011年に上梓した拙著『互性循環世界像の成立—安藤昌益の全思想環系—』において一応の提起を行ったが、その段階では昌益思想の全体像を示すことが主目的だったので、概略に留まった。そこで本稿では昌益の社会思想の核心とも云える「安平」（平和）思想と「直耕」思想の成立に関して、一步立ち入った考察を展開する事にしたい。

§ 1 先行典籍からの主体的選択吸収と環境的外因

（1）諸典籍からの選択吸収の主体行為

かつて早稲田大学の橋幸泰氏は、安藤昌益がその社会思想を形成する上で『太平記評判秘伝理尽抄』から決定的影響を受けたとする若尾政希氏の所論を批判的に取り上げ、「同時代、類似の思想を形成しつつも、当該期の政治常識・社会通念に埋没する者と、そこから脱皮して転回する者が存在するのはなぜか？」と問いかけた。即ち、この『理尽抄』の読者でも、安藤昌益とそれ以外の読者（河内屋可正など）に、思想形成上の大きな差が出たのはなぜかと提起し、歴史規定性の中で複数の可能性がある時に、各人の主体的生き方如何によって大きな違いが出る事を重視しなければならないと指摘している。（2010年度早稲田大学教育学部講義要録「歴史における主体性（1）—社会通念と主体形成」より*）

要は昌益に限らず、ある思想家が諸典籍から思想や知見を吸収した際に、専ら受動的に影響を受けたと見なすのではなく、当該者が主体的に選択吸収して思想形成を進める側面をもっと直視しなければならない、という事であろう。これは筆者も全く同感であり、安藤昌益は『太平記評判秘伝理尽抄』から「決定的影響を受けた」というよりは、この典籍からも自身にとって有意な事項を主体的に選択吸収して思想形成を進めた、というように捉えなければならない。そうでないと、安藤昌益と河内屋可正の大きな思想的違いが説明できないわけである。

ところで昌益は、『太平記評判秘伝理尽抄』以外からも、多くの典籍から主体的選択吸収を進めることで、自己の社会思想を構築していったと言えよう。その具体例として、この論稿では昌益の平和思想と「直耕」思想に関して、次節で中国の古典『六韜』と近世日本の西川如見の通俗本からの、昌益の思想吸収を取り上げる。

（2）東北飢饉体験の外因性を併せ考察したい

思想形成に関して、典籍からの選択吸収に加えて見逃せないもう一つの要因として、八戸地方の凶作・飢饉環境の問題がある。前者が思想形成上の内的要因としてあるところに、後者が外的要因として加わることで、初めて昌益の思想形成が実体験的に進むのではないか。この二つの要因を排反的に一方に絞ってはならないと思われる。前者だけだと、昌益はただ書物上の知識だけで社会思想を観念的に構築したことになる。後者だけだと幕藩体制への批判から広く世界的範囲での「私法世」否定の思想が形成

* 著者のこの要録が Web に掲載されていたので、参照した。

されえないのではないか。従って、内因と外因の相乗効果としての思想形成の観点が必要であろう。

§ 2 「文韜」批判から治乱否定の「安平」思想へ

(1) 「文韜」は周の太公望の撰による軍学書『六韜』の一篇である。『六韜』は「文韜」「武韜」「竜韜」「虎韜」「豹韜」「犬韜」の六篇で構成されているが、全体としては軍学書であるにも拘わらず、「文韜」は軍学に先立つ統治者の政論篇といった性格の強い内容である。昌益は稿本『私法儒書卷一』で「軍書」批判の一環として『六韜』を取り上げ、その一部として「文韜」を批判しているわけだが、ここから昌益が引き出した結論は、軍学よりも政治の根幹を衝いた重要な役割を持っている。

「太公、文王の問いに答へて曰く、『天下一たびは治まり、一たびは乱る。天地・自然の道の為す所に非ず、時の君の賢・不肖に由る。君、賢なる則は長く治まり、君、不肖なるときは疾く乱る』と云へり。之れを以て之れを省よ、自然・転定の道に於て治乱を為すこと、絶えて之れ無きことなり。故に伏羲出て君に立たざる異前の世は、治乱の名を聞くこと無きこと至って明らかなり。」

(昌益全集第三卷 104 頁)

この引例から明らかなように、昌益は一治一乱は人の世にひとたび統治者が出現すると不可避免的に繰り返される事態であること、伏羲以前の世にはそれが無かったと言える事、の二点を指摘している。

「伏羲、君に立ち乱世を始めて、後世、無尽に乱世と為ると観極めたるは、太公一人にして、古今に又と二人無し。(中略)世界の治乱は、君を立つる故に有りと、太公之れを言へり。」

(昌益全集第三卷 105-106 頁)

(2) この引用では、人の世に君主が立つようになった事が乱世の始まりでもあると喝破した者として、昌益が太公望に対して高い評価を与えた事が分かる。しかし昌益は同時に、一たび君主が立つようになると、以後の社会は治乱の繰り返しが止まないから、王道・仁政を施し軍備を整え、文武両道に通じる事でこれを收拾するしかないと見立てた事が太公望の限界でもある、と論じた。

「然して、太公、堯王の王道・仁政の徳を揚げて、文・武の為に之れを演ぶる。所詮、君を立つること止むべからず、治乱止むべからずと思ふにや、軍書を作り世に残す。」

(昌益全集第三卷 107 頁)

統治と争乱が相互依存的に悪循環を続けるのでは結局のところ、統治も新たな争乱の原因と為らざるを得ず、治・乱はどちらも乱れた状態なのだ、と昌益は論を進めた。

「乱に対しての治なれば、治与に乱なり。故に治乱は乱の総名なり。(中略)治まると雖も自然を掠むるは乃ち乱なり。」

(昌益全集第三卷 107 頁)

従って真に平和な世は、争乱が無いだけで無く統治・支配自体を根絶しなければ到来し得ない事に為る。こうして昌益は統治者・支配者および、その仕組みを保持するための軍備も否定して「自然・無乱の道」を展望し、「自然世」の回復を主張する。

ここで注目したいのは、昌益が中国古代の伏羲の出現を批判するばかりで無く、古代インドにおいて釈迦が仏法を始めた事も、乱世の始まりだとしている点である。つまり昌益は乱世の始まりが統治者の出現という政治制度の方面からだけでなく、思想・宗教の方面からももたらさせる事を直視している。

「又、仏法も然り。心の治は悟りなり。心の迷ひは乱れなり。故に悟迷は心の治乱なりと、心を説く釈迦なり。極楽・地獄、仏心・衆生心とは、皆俱に心の治乱なり。此の心の治乱為る悟迷は、自然・直耕の人に於て之れ無きことなり。」

(昌益全集第三卷 106 頁)

こうして昌益は、その平等社会思想形成上の初期＝40歳代前半において、治・乱双方の否定の上に
太古自然世－私法世－あるべき今後の自然世

という巨視的社会展望をうち立てた。——この『六韜』批判の段階では、「自然の世」「私法」という用語はすでに用いられているが、「私法世」「法世」という語は使われておらず「乱世」という表現が多いが、本質的に「乱世」＝「私法世」の認識に達していると言えよう。

(3)「国の大事」は軍事で無く「直耕」：『六韜・文韜』で 治・乱の双方を否定した昌益は必然的に、「国の大事」は軍事では無く「直耕」を第一に置く事だと主張する。『孫子』の冒頭にある「兵は国の大事、生死の地、存亡の道」という主張を批判し、「直耕」こそが国の存亡の根本だと置き換える。

「国の大事は直耕なり。生死の地は素より直耕なり。存亡の道は信に直耕なるのみ。天下の太本は直耕なり。(中略) 故に兵は直耕の道に背くを呵るしかの具にして、奪ひ殺すの法に非ず。」

(昌益全集第三巻 127 頁)

この引例の後半では、「兵」は殺戮の手段としてでは無く、「直耕」に背く者を懲らしめる手段であるべき、という論理になっていて、強制就労のためなら兵事は許容されるが如く書かれているが、初期思想の未完成性とでも云うべきであろうか。

ともかく、こうして『孫子』批判を通じても殺戮や統治に為の兵事は否定される。『孫子』が批判されれば、それと並び立つ兵書『呉子』も批判の対象になるのは当然であり、その批判を通じて再び治・乱の双方が否定される。

「呉起、戦ひに勝ちて他国を奪ふことを知謀と為す。又他に奪はれ、乱世の絶えざることを知らざる小人なり。凡そ軍勝を好む者は小人なり。(中略) 治乱俱に私法にして、自然の道に非ず。(中略) 治乱の根を去ることを知らざる者は、聖賢たりとも、与に乱人なり。況んや呉起が如きに於てをや。」

(昌益全集第三巻 130-131 頁)

(4)「転下の安平」論。治・乱双方の否定の論理は必然的に、“真の平和”論をも唱道する。権力の行使によって統治された、見かけ上の平和は新たな乱の根となるから、一時的に戦乱が収まった状態に過ぎず、従って本当の平和ではない、と。

「乱は治の根なり。治は乱の根なり。故に堯の世の太平に治まると云ふは、必ず乱の根なり。(中略) 転下の安平を欲する者は、必ず治乱を以て二つと為すべからず。治乱にして一世なる其の所以を明かすべし。」

(昌益全集第三巻 196 頁)

昌益は現代人の「平和」という用語は用いていないが、「安平」の語で同じ内容を表している。

現代の国際平和学者・ガルトウク氏の用語を用いて云えば、統治は構造的暴力支配であり、争乱は直接的暴力支配であり、その双方を否定して、初めて真の平和がもたらされる事になる。この点は久しく以前から村瀬裕也氏によって取り上げられてきた事を付言して置く。

§ 3 西川如見の天地直道・農人論から「直耕」思想へ

(1) 安藤昌益の思想根幹概念の形成上、西川如見の『町人囊』『百姓囊』『水土解辯』などの通俗本は大きな役割を果たしたと云えそうである。そこには「進退」用語・概念の粗形や「無始無終」用語・概念が見られるからである。まず「進退」に関しては、如見は「陰陽」と「進退」を共に「動静」との関連づけで論じている。

「動静の静は僅かも動を離れず、天の運行地の生々常に健々として須臾しゆゆも止時なし。動は天の進むなり。静は天の退くなり。進むも是動、退くも又是動也。動く事なければ退く事あたはず。陽も是動、陰も是動也。動に進退遅速の時ある、是を動静とす。止静は動静を離れて論ずべし。天地萬物滅し已る事なき内、止静は置くべきところなし。」

(町人囊底拂巻下)

昌益はこの記述を見て、伝統的な陰陽概念を新たに「進退」の用語・概念として表記する事を思い立つ

たのではあるまいか。——もちろん、これだけが昌益の「進退」用語の唯一の源泉とまでは言えないが。また「無始無終」の用語・概念についても、すでに如見の『水土解辨』にたびたび見られる。例えば、

「天地は無始無終なる故に、其命数畢竟きはまりなき道理なり。」「無始無終にして知べからざる者は大氣の天地なり。(中略) 五行の内一行いまだ滅せずと云はゞ、則四行もまた滅すべからざる道理あり。」

(水土解辨)

このように「無始無終」だけでなく、五行論についても一行と他の四行の併存を論じている。筆者はこうした用語・概念が昌益に有意義に継承されると共に、「直耕」の用語・概念の形成にとっても、『町人囊』や『百姓囊』の通俗本の記述を昌益が有意に活用したと推測する者である。

以下にその材料となり得る部分を抽出して紹介したい。

(2) 昌益の「直耕」の用語と概念の形成に関しても、『町人囊』と『百姓囊』に材料となりうる記述部分がある。如見の『町人囊』には、「直」の字義として、読み方に応じて次のように三つの意味を提起している。

「直の字に此國の言葉つくるに、三つのしな分れぬ。『すぐなり』といへば、かたちあるたぐひの曲まぬころ、『すなを』といへば、本つ心の誠なるかたち、『ただち』といへば、身のみさほの正しきをしめす。」

(町人囊底拂卷上)

簡潔に言うと、「すぐなり」は正直、「すなお」は誠心、「ただち」は正道、ということになるだろうか。

「直は天理なり。(中略) 萬國の道いづれか質直のすがたを本とせざるべき。天地日月星辰かはるがはるめぐり、木火土金水おのおの相生じ相剋し、おこなはれてやむ時なきは、みな天つちの直道也。」

(町人囊底拂卷上)

この引例において「直」＝「天理」であり、天地の運動が正常に行われている姿が「直道」だという論展である。如見が「直」の字に大変こだわる思想家であることが窺える。

次いで如見は『百姓囊』において「農人」論を展開している。

「四民は、天尊の御民にて、國主も得て私すべからず。人倫ありておのおの所作を營に、先農業なり。人は食なければ命なし。次に衣なくては人倫にあらず。このゆへに第一に、農人出て穀をつくりて食とし、麻を植て衣となし、衣食ありて後、家宅造りて住所とす。是を人間の三養といふ。」

(百姓囊卷一)

士農工商の四民秩序を肯定する如見ではあるが、農業・「農人」の重要性をこのように強調している。更に「農人」の持つべき資質と品性として、天地の「直道」に通じ、質直で謙虚な心を持つ事が必要であると主張する。「農人」という改まった表現を提起した所以であろう。

「天の時を敬み、地の利にしたがふは、人間の常理也。ことさら農人は、一日も天の時、地の利をつゝしみ、従ふ事なくんば有べからず。耕穫収藝、みな天の時にして、曆の用なり。」(百姓囊卷二)

「百姓農人は、第一質直を先として、謙下の意を本とすべし。たとへ學問才能ありとても、驕慢のころをおこす事なかれ。いはんや百姓をや。」

(百姓囊卷二)

(3) 昌益は如見のこれらの天地「直道」論と「農人」論に触発されて「直耕」という用語・概念を打ち立てたと思われる。昌益の「直耕」概念がその成立当初から、単に農耕＝直接生産労働だけを意味せず、天地万物の生成活動と、それに則った人間の生産生活の両面をさす広い意味の概念として打ち立てられた背景には、こうした如見の天地「直道」とそれを受け継ぐ「農人」論が役に立ったといつてよい。

「農は直耕・直織して安食・安衣し、無欲・無乱・無法にして自然・転定・直業の直子なり。故に貴からず賤しからず、上ならず下ならず・・・。」

(昌益全集第三巻 208-209 頁)

「夫れ天の時とは四時の春・夏・秋・冬なり。地の財とは万物の發生・盛育・実収・蔵安なり。是れが転定の直耕なり。人は此の直子なり。」
(昌益全集第三卷 221 頁)

このように如見による天地の「直道」とこれを受け継ぐ「農人」という概念が、昌益の「農は・・・転定・直業の直子」という概念に通じる先行事例として挙げられるのではないか。両者が「直」の字義に執着している共通性に加えて、昌益は如見のこのような先行記述に具体的に接して、「直耕」の概念と用語の創唱にこぎ着けたと筆者は推測する。

§ 4 凶作飢饉体験は幕藩体制否定の外因として作用

(1) 以上に見てきたように、昌益は『六韜』の「文韜」批判を通じて治・乱双方の否定から恒久平和の思想をうち立て、統治者・聖人の出現する以前の太古「自然世」を推量した。それは軍術の行使によって乱世をまた統治の世に転化する悪循環に否定であり、軍学そのものの否定でもあった。

また一方では西川如見の『町人囊』『百姓囊』『水土解辨』等の通俗本にある「進退」・天地の「直道」・「無始無終」などの概念を継承展開して「直耕」概念の創唱に到達した。不断に続く天地の生成活動の継続として生産生活を続けるのが、一連の「直耕」であり、「転定の直耕」と「人間直耕」の概念の同時成立となった。

(2) それでは、八戸における凶作・飢饉体験は、こうした昌益の思想形成には何も影響を与えなかったのか、という問題が生じる。筆者は凶作・飢饉体験は昌益のこうした内発的思考展開に対して外的要因として作用したと見ている。典籍を通じた根源的恒久平和思想と「直耕」の思想の確立だけではまだ、現世を「私法世」と捉えて、その全否定にまで必ずしも進み得ないのではないか。太古に搾取の無い平和な「自然世」が有ったと推量するだけで、現世を厭うだけのペシミズムに終わる場合もあり得るであろう。

しかし昌益は、東北の地で現実に土農工商の世で起きている生産者収奪と権力支配の過酷な実態を直視したことで、根源的思考の進展という内因と、凶作・飢饉の過酷な実態への直面という外因が相俟って、遂に土農工商の世＝「私法世」の全否定に進む事が出来たと云えよう。

(3) では昌益は八戸在住時代に数回あった凶作・飢饉（延享2年・延享4年・寛延2年・宝暦5年）のうち、どの時期の体験を外因契機として思想転換を遂げたのか？ この点については当編集者は既に拙著『互性循環世界像の成立』（2011）で、延享2年の風水害・凶作・飢饉であると断定した。これは昌益が八戸に登場して、最初に出会った飢饉体験を意味する。しかし八戸の研究者の方々は概して、それから4年後の寛延2年の猪公害を伴った凶作・飢饉の方を重視する論調が多いが、昌益の著作活動の展開との関係で、この時期を社会思想転換期とするのは難点がある事を、拙著で既に指摘したので、ここでは繰り返さない。八戸の研究者たちが寛延2年に拘るのは、この年の凶作が猪公害に晒された点を重視するからと見られるが、昌益は著作の中で、猪公害を特に取り上げた記述は行っていない。この点からも、寛延2年の凶作・飢饉だけに拘るのは不適切であろう。

(4) とにかく、八戸における凶作・飢饉体験は、生産者のまっとうな生活に対する領主階級の収奪の過酷な実態を目の当たりにした事で、既に昌益が典籍を通じて内発的に進めてきた統治・争乱双方の否定による「安平」思想および「直耕」確立に向けた思想営為と結合して、幕藩体制自体の否定へと突き進んでいく外的・直接的契機となったと言えるのではないか。

このようにして、安藤昌益の社会思想の根本的改変は、諸典籍からの選択吸収という内因と、八戸ひいては東北の厳しい飢饉環境の実体験としての外因とが相乗的に結合して、初めて成し遂げられたと言っているのではないか。

書評：山崎庸男著『安藤昌益の実像 近代的視点を超えて』

本年三月に、山崎庸男氏の『安藤昌益 近代的視点を超えて』が農文協から出版された。山崎氏は安藤昌益の医学論関連の重要な稿本『真斎謾筆』『神医天真論』『進退小録』『自然精道門』および『真斎方記』『真堂堂雜記』『医真天機』を発見した人である。狩野亨吉氏を除いて、個人でこれだけ多くの重要資料を見出し得たのは、昌益研究界では珍しい事だ。その同氏がこのたび、昌益の伝記の伝記的研究と思想形成の両面にわたる著作を出されたので、熱い関心をもって本書を読み通した。

本書は大きく第一部の人物史・研究史「安藤昌益と彼をめぐる人びと」と第二部の昌益思想論「安藤昌益思想の形成・展開・完成過程とその特徴」から構成されているが、分量的には第二部の方が二倍強の頁を割いている。以下にその読後感想を概括的に記しておきたい。

1) 新たに開拓した側面

まず、本書が果たした功績の面から触れていきたい。**第一の功績**は、安藤昌益の人物史と没後の八戸・大館・江戸での継承史について、かなり総合的に扱っている点である。それに先立つ 12-26 頁の「一 『自然真道』と安藤昌益像の変遷—研究史概観」はあまりにも簡単すぎて感心できない。(失礼ながら、これは著者の昌益研究史の把握が相当に雑だった事を窺わせる。)

そのあとの「二 安藤昌益の生涯」(27-65 頁)「三 安藤昌益を語り継ぐ人びと」(66-84 頁)は史料解釈を兼ねて、かなり手際よくこれまでの多くの研究成果を自分の観点で整理した。昌益と関連人物の伝記的・地域的史料に関しては、それぞれの分野の研究者によって、同一の史料に対しても見解の相違が交錯しており、その上に学派間・地域史研究者間の立場・観点の相違もあって、八戸・大館・江戸での昌益思想の継承史を総合的に扱うには一定の困難さが伴うと思われる。著者は千葉県在住という事もあって八戸・大館・江戸の、いずれの地域史研究にも拘束されない立場で論を進めている。個々の記述に関しては、当編集者にも意見・異論のある部分もあるが、こうして地域の利害から離れた立場の研究者による、総合的取り扱いがなされた事は評価されると思う。

第二の功績は、昌益の思想形成研究の方面で、「前期」(=『暦ノ大意』『博文抜粹』『確龍先生韻経書』などの制作期)の昌益思想を高く評価し、「中期」「晩期」への一貫性の面を重視した点である。昌益の思想形成をこのように三期に区分する方式は、安永寿延氏の創案であり、同氏がこの点では安永説を受け継いだことが窺える。寺尾氏の場合は、この「前期」を「先初期」と呼んで、どちらかと云うと「初期」(=紛らわしいが山崎氏の云う「中期」の前半に相当)への付け足し的な習作の時期、本来的な昌益思想確立以前の未熟期、と云うように位置づけていた。当編集者の場合は、この「先初期」に既に昌益の思想展開上の基本的な諸概念が未熟ながらも出始めている上に、音韻言語論の分野が先行的に形成されていることを高く評価して「早期」と名付けた。

従って当編集者の立場からすると、山崎氏の「前期」昌益思想への高い評価には同感であるが、見解を異にする面もある。山崎氏は前期の思想がその後の「中期」にも一貫して引き継がれていったという把握だが、評者は「前期」から「中期」には一貫している面と明確な質的相違との両面を指摘したい。質的相違とは第一に前期の「五運六気・陰陽」説から「五行進退」・「通横逆」併用の構造的 세계観への質的發展、第二に「直耕」「自然世と私法世」思想の確立に伴う、“直耕者と横領者の非和解的・根本的対立”観が新たに加わったという点である。孰れも抜本的改変であり、単なる連続性ではない。

功績の面についてはこれくらいにして、以下では本書がこれまでの昌益研究から後退したと思われる諸点、および重要事項で欠落している問題などについて言及したい。

2) 大きく後退した側面

① 直耕史観からナショナリズム史観への大後退

山崎氏は儒教や仏教が入ってくる以前の太古日本からの自然の神道を基軸としたナショナリズムを昌益に見出した。この観点には当編集者は驚くと共に、到底賛同できない。昌益の社会思想の根底にあるのは、日本・中国・インドいずれを問わず、太古には「聖人」による支配のない万民「直耕」の「自然世」があったが、それぞれの地域に「不耕貪食」の支配者が現れて「私法世」ができてしまった、とする“直耕史観”であろう。(ただし、これを唯物史観と同等視するのは一時代前の発想であり、区別しなければならない)これを自国・日本中心のナショナリズム史観に替える事は、先行研究者の成果からの大後退であり、昌益の著作の読み違いというほかない。

昌益が自国・日本に対する愛国心・民族心を持っていることと、自国中心のナショナリズムの史観とは区別されねばならない。直耕者と横領者の根本対立認識が日本史・中国史・インド史を含めて論じられている以上、これをぼかして昌益をナショナリストに仕立てるのは、大きな逆戻りであろう。

② 「自然」概念をめぐる誤解と“逆矮小化”

山崎氏は「昌益の「自然」の意味内容は、狩野亨吉以来連綿と「自然界」として理解・把握されて来た。この大きな壁・強固な岩盤のような長い間の刷り込みを取り除くことは容易なことではない。」(185頁)という認識に立って、昌益の云う「自然」は近代「自然界」概念ではないと十数回に涉って、くどいまでに記述した。ここには二つの大きな事実誤認がある。

まず、昌益の「自然」が近代「自然界」概念に一致していると指摘したのは、安藤昌益全集の監修者・寺尾五郎氏が1988年に『直耕』誌の創刊号の巻頭論文で書いたのが初めてで、寺尾氏自身のそれまでの著書『先駆 安藤昌益』(1976)、『安藤昌益の闘い』(1978)でも、明確に言っていない。まして狩野亨吉の安藤昌益論(1928)における「自然の正しき見方」の項目を見ても、昌益の「自然」が「自然界」だとは論じていない。寺尾説は今日の安藤昌益研究界で広く受け入れられたとは言い切れない。これを留保付きで肯定しているのは当編集者・東條くらいで、かつて寺尾氏と共に昌益全集に携わった5人の編集委員でも、この件で寺尾氏を明確に支持する意見は無く、逆に反対意見もある。従って昌益の「自然」=自然界概念説が確固として継承されてきたというのは、大誤認であり大錯覚である。

第二に、寺尾氏が昌益の「自然」=「自然界」説を提起したからと云っても、それはどんな場合でも「自然界」概念に限るという事ではない。昌益の「自然」にも多様な特徴がある事の指摘は寺尾氏が監修した『安藤昌益事典』での「自然」の項目解説を見れば分かる。そこでは昌益の自然観として物質性・運動性・矛盾性・生命性・主体性の五点が取り上げられており、昌益の「自然」が有機的生動運動の意味にも受け取れる事を論じている。此の点は『安藤昌益の自然哲学と医学』で一層詳しく記述されている(同書15-19頁)。

こうした点を理解すれば、寺尾説における昌益の「自然」が「自然界」概念だけと受け取るのは極端な決めつけになり、“逆矮小化”に陥っていると言われても仕方が無かろう。「自然」の語は中国古代の“自ずから然り”の無作為概念が多義的に展開して、魏晋時代から万物の根源や天地万物をも語義に含めた用法が生まれた。こうした背景があるので、近世日本においても未分化の状況で、時には「自然」の語が天地万物=実在物総体を含む意味にも用いられるようになったと言ってよい。当編集者は山崎氏とは別に山鹿素行・伊藤仁斎・西川如見・浅見綱斎・会沢正志斎・二宮尊徳・大原幽学の「自然」概念の検討から、このように結論した。そしてこの要素が未分化のうちに受け継がれたからこそ、natureの語に幕末から明治にかけて「自然」の語訳が定着していったと言えよう。

③ 世直しの主体形成認識への無関心

山崎氏は「自然活真の世に契ふ論」は「活真世」への過渡社会論ではなく、現世＝法世下での「昌益の思弁的契合構想論」だと見た（276頁）。当編集者は山崎氏がこのように断じたのは、昌益が中期の著作『統道真伝』あたりから、世直しへの主体形成について真剣に考究し出した痕跡への探究が欠落しているからだとしている。これは氏の所論には昌益の「正人」論への詳しい探究がない事と表裏の関係にある。当編集者の場合は、「直耕の衆人」から「正人」への成長過程を1996年・2011年の両著作において、常に取り上げてきたが、山崎氏にはこうした方面への関心が希薄になっている。

山崎氏において、この主体形成論への無関心が、現世のもとでの消極的な「思弁的契合」理解へと傾斜していくのが見て取れるので、先行研究者が開拓した成果に水を射してしまったという他ない。こうした背景には、氏の昌益思想形成区分の「中期」に、その思想転換直後の『私法儒書巻』『私法神書巻』『私法仏書巻』など『学問統括』諸巻と、それより後に書かれた『統道真伝』諸巻を一括的に取り扱っているという状況がある。この期間は当編集者の推定では約12年に及ぶので、その前半と後半では思想展開に大きな違いも出ている。昌益が世直しへの主体形成について真剣に考究を始めたのは『統道真伝』からで、『学問統括』諸巻と刊本『自然真営道』ではまだ希薄と云えるので（＝伝統教学総批判の作業で手がいっぱい）、これらを一括的に扱おうと、そうした違いが一層見えにくくなるのだ。

『学問統括』諸巻・刊本『自然真営道』に比べて、『統道真伝』諸巻は伝統教学へのイデオロギー闘争性が尖鋭化したうえに、「正人」論を始めとした世直しへの主体意識の高揚を意図した記述が見られるようになり、一括的に扱うのは不適切と思われる。この理由により、寺尾五郎氏は安永寿延氏の「中期」区分を二分して、その前半を「初期」、後半を「中期」と名付けて、その思想展開をより明確にしたわけである。山崎氏はこれをまた逆戻りさせたことになる。

3) 研究の欠落した側面

① 直耕知・帰納知への無関心化＝形而上学的議論の偏重

山崎氏はあまりにも「真気-自然」をめぐる形而上学的議論に拘泥して、昌益の自然思想も社会思想もすべてここから演繹的に展開されたかのように議論を進めた。そのために、昌益が知識には「直耕知」と「書学知」の二種あり、前者が如何に大切かを強調した事など無視してしまったように見受けられる。昌益が日常、町医者として幾万の患者に接し、そこから庶民が持つ八情八神の豊かな感情・理性の発現と病状を精神医学論に組織化したり、「直耕の衆人」の生きざまを見届けつつ世直しに向けての人生訓の構築に進んだ事など、実際知・帰納知の側面を軽視していないだろうか。「自然真営道」の思想・理論は、こうした側面からも形成・構築されていたのであり、「真気-自然」の形而上学的思考・理論思考だけで演繹的に構成されるものではない。

「真気-自然」論の検討に拘り過ぎて、頭でっかちの形而上学者・昌益という人物像すら作ってしまった感がある。これが昌益の実像だと言われれば、評者はno!と言わざるを得ない。もっと昌益の理論知-経験知、分析知-総合知、演繹知-帰納知といった、両面からの探究がなされる必要がある。そうでないと、昌益思想・昌益人物の実像解明は進まないであろう。

② 個別思想分野への探究不備＝真方医学論の全体像、農論・地域生業論・音韻言語論の不在

著者は昌益医学論の構築に、18世紀後半の『内経』偽作問題・「運氣二火」をめぐる医学界の論争が影響を与えたと立論しているが、此の点には初歩的ミス＝時期的ずれを指摘せざるを得ない。昌益医学論への影響を与えうるのは「18世紀後半」ではなく「18世紀半ばまで」の学問的背景である。

そのうえ、133-148頁の記述は、概して外在的な記述に留まっており、昌益の医学理論形成を内側から探究した内容になっていない。昌益がどうして「気道・味道」互性論を提起し、胃脾を中核化した四臓四腑論に進んだかを論じていない——その前段の「五臓六腑」「六臓六腑」の通説を五行論による「五

蔵五府」に変えた点は書かれているが、四臓四腑論への改変の意義には触れていない。著者による昌益医学全体への把握は雑で、「気道・味道」互性論への内在的展開への論及はなく、婦人科の議論にばかり狭く拘りすぎている。また昌益の医学理論とも繋がっている音韻言語論へのアクセスも見られないが、これは昌益医学体系の構築上、無視できない事である。前期の昌益は、音韻に通ずる事が「医の太元」と論じていたからである。昌益の医学論の分野の総合的研究は、(当編集者も含めて) これまでの先行研究もまだまだ不十分で、未開拓の余地が多々残されている。

このほか、昌益なりの農論や地域生業論なども相応に取りあげて、著者の観点で新たに論じて貰いたかったが、欠落している。171-173 頁では二宮尊徳と昌益の農耕論を比較して、昌益が思弁的な「気」の「直耕」論者だとしているが、昌益にも相応の農論的記述はある事が『真斎謾筆』などで確認されるのである。昌益が本草学の方面からも、ある程度は農耕・農業について具体知を得ている事、また流域に沿っての地域間の生業論などは中期から晩期にかけて、より具体的に論述されていた事などを忘れないようにしたい。昌益は農書と云えるだけの著作は無いが、思弁だけの農耕論者・生業論者ではない。

4) 総観—実像未だ遠し

① 昌益思想を近代的視点で捉える事の不適切性の趣旨自体は今後の研究において心に留めおき、活かすようにしたい。但し、著者がこの点を強調するために、今般の著作で恣意的な読み込みをした側面もある事(自然=「自然界」論での誤解と狭い決めつけなど)は率直に指摘しておかねばならない。

また先に指摘したように、この著者が昌益の世直しの主体形成への立論に無関心な事は、昌益思想を時代に埋没させかねない消極性を内在させている事も逆に指摘せざるを得ない。

② 序文の10項目提起に対して：著者は本書の序文において、先行昌益研究に対して以下の10項目にわたる疑義と私見を述べた。ここでそれらを縮約的に記したうえで、評者の総括的意見を述べたい。

- 1) 先行研究では昌益思想の「革新的」内容と「古い」思想基礎の「融合」を整合的に理解していない。
- 2) 狩野証言にある徳川家康批判の「張紙」については後世の人士による作為の疑義がある。
- 3) 稿本『自然真営道』がなぜ北千住に所蔵されていたかの解明の必要性。
- 4) 大館資料の『石碑銘』『掠職手記』の再解釈による、これら資料の広い歴史性の指摘。
- 5) 昌益の前期思想から中期思想への原理的一貫性の明確化と、東北飢饉による思想転換説への疑義
- 6) 18世紀後半の医学論争により「無二一真」の運氣論思想が確立され、聖人批判の端緒が開かれた。
- 7) 昌益の「自然」「真」の詳細な分析から、昌益の「自然」は自然界の意味ではないと断定した。
- 8) 昌益の上下身分の「二別」批判は幕藩体制の分析から出たものでなく、「無二一真」論の原理思考から演繹されたものである。また「四民」批判も中国史での批判で、近世日本社会での批判でない。
- 9) 昌益の伝統教学批判の本質は自国肯定のナショナリズムを基底にした神道思想に根差している。
- 10) 「八戸全国集会説」は、当時の八戸・大館の時代状況から見ても困難性があり、再考が必要。

これらのうち、6) 7) 8) 9) については、既に評者は著者の論展が不適切と断じた。1) は研究者ごとに見解が相違するであろう。2) は個別事項、3) 4) は主に伝記的事項なのでここでは言及を省く。5) は原理的一貫性というよりも原理的思考の“粗形”が前期に形成されていたと云うべきであろう。東北飢饉は思想転換の内因でなく外因と位置付けたい。10) は門人たちの意見陳述の集約・交互紹介が集会無しの書面集約だけでは無理だと思われるので、評者は集会がやはり行われたと判断する。

③ 読みづらさ：引用文の段差化・最小化の工夫を

山崎氏はかなり頻繁に昌益の原文や関連文献からの引用を行った。技術的な事ではあるが、活字が小さい事も加わり、大変読みづらかった。引用文は、本文から一字分か二字分下げて段差を付ける、などの工夫が望ましく、また数行以上に渉るような長文引用は頻繁に行わない方がいいのでは、と感じた。

〈結語〉山崎氏の昌益思想論は、思想形成区分では安永寿延氏の「前期・中期・後期」三分説を踏襲し、思想内容の把握に関しては三宅正彦氏の所論（真気論・神道論）に接近した見解を採り、その昌益思想像はナショナリストとして描かれ本居宣長にも接近したと云える。「近代的視点を超え」るべく提起された内容は形而上学的議論に偏重し、著者の目標だった「安藤昌益の実像」には達しえず、新たな虚像すら提起したように見受けられる。昌益と関連人物への伝記的研究方面での論及と、初期昌益思想の再把握には同感できるところがあるが、「中期」以後の思想展開へのアクセスには相当な偏りが目立ち、賛同できない。

昌益思想の実像解明には、単に近代的視点の是正だけでなく（それは一要件でしかない）、昌益思想の全分野にわたる包括的で整合的な研究をやり遂げることが必要であろう。これが出来なければ、真に昌益思想之実像に迫る事は出来ない。また伝記的研究に於いても、昌益の幼少期から青年時代・少壮期までの解明が進まなければ（＝それはまだ多くが霧の中）実像解明はとても覚束ない。その意味で、昌益の実像は思想の面・伝記の面いずれにおいても未だに解明途上にあり、今後も多くの研究者の持続的協力作業が不可欠であろう。（2016年7月30日）

放談室

*文化麺類学思考の有用性—東西自然観の比較論との関連で—

今号は東西の自然概念をめぐる議論に誌面を割いたので、その補助線思考として石毛直道著『文化麺類学ことはじめ』（1991；講談社学術文庫に収録 1995）を久しぶりに開いてみた。本書は世界各地の多様な麺類を2000年以上の世界史の中で系譜化して扱っている。講談社学術文庫版の289頁には「麺の系譜図」が載っていて、古代の「湯餅」形態が世界の各地域毎に次々と分化を進めて、現代世界の多様な麺食品・料理の分布に到った流れを概観できるように纏めている。この図を見ると、生物進化の系統図や宇宙の物質分化の系統図を連想せずにはいられなくなる。それと同時に、中国の麺類も日本のそば・うどんもイタリアのパスタもみな、穀種食材加工上の共通性を持ちながら、風土の産物としての異質性・特徴を備えた存在として、改めて考えさせられるところがある。つまりは東西の自然概念についても、このように共通性と異質性の両面から見ていく方が、単純な異質論・同等論より遙かに豊かな理解が出来るのではないと思われる。この場合に、科学者や技術者はどちらかという共通性の方により関心が向き、哲学者は異質性の方にこだわる、といった傾向が出るかも知れない。ここには科学の普遍性と文化の異質性といった問題も背景にあるかも知れない。

昌益思想研究の世界では、こうした両面思考のできる研究者が少ないのが現状ではなかろうか。

*屋久島で昌益の社会思想を考える—島嶼沿岸村落共同体の歴史と現在—

今年も5月に九州の南端・屋久島に出かけてきた。屋久島はとんがり帽子のような丸い島で、中央部は深い山岳地帯になっていて、中世から集落はすべて海岸沿いにしか発達しなかったという。専ら漁村だけで構成されてきたわけで、明治政府が島の杉林の大部分を国有林にしてから、昭和に入って屋久杉を伐採して港へ搬出するための営林署職員集落が山中に例外的に一時設営された。主要には海岸線に沿った漁村しか無かったと言ってもよく、島の中央部の山岳地帯は山の神が宿る神聖な領域として崇められてきた。しかし漁村と言ってももちろん畑作農耕も行われ、一部では水田稲作も行われた。江戸時代

には屋久杉の伐りだしで年貢の代わりに薩摩藩への物納も行われるようになった。

この島に来てみると、流域に沿った山里—平里—海里の地域生業論を説く安藤昌益の地域思想とのずれを感じないわけにはいかない。なにしろ、九州で一番高い宮浦岳（1936m）がこの島の中央部に聳えているのだから、傾斜は急で山里と平里はなく、人の住む場は海里だけに限られてくる。いやむしろ、このような島では、山里と海里が重なっていると言った方が正確かも知れない——隣の種子島が平坦地の多い島であるのと極めて対照的である。そして各村落は島を周回する沿岸道路沿いに数珠玉のように連結構成されている。『屋久町郷土誌』全4巻を見ると、実に3巻分が各個別村落史に当てられ、残りの1巻で町全体の地理と歴史民俗が扱われていて、通常の市町村史との違いを感じさせる。

昌益の地域生業論を日本列島の中で相対化して捉えるには、こうした島嶼部に来て、比較論的に見直すことも意味があると感じた。此の島は歴史的には、遣唐使が中国に向かう際の出航基地として機能したり、仏教の戒律その他を伝えるために日本に向かった鑑真和尚が最初に漂着した島でもあり、また江戸中期に最後のバテレン、シドッチ神父が漂着した島でもある。現在は日本からの世界自然遺産登録第1号地として、環境共生の実践の場として、多くの人々が行き交っている。新しい価値観を持ってここに移住した新住民の方々もいて、屋久島は興味が尽きない島である。

*** 昌益研究者の諸類型—長期継続型・一時集中型・中途休業型・前進後退型・一点称揚型—**

長年、昌益の思想と取り組んできたが、それは同時に様々な研究者の類型を見出す結果ともなった。以前、昌益研究者群を研究志向の内容的違いから小乗系（アカデミズム志向）・大乘系（民衆化志向）・便乗系（時流的解釈志向）と三分して提起したが、ここでは視点を変えて主に研究様態で五つに分類してみよう——これは、別に昌益思想研究に限った事ではないが。

まず、長期継続型とは読んで字の如く、若い時期から連続一貫して昌益思想と取り組んだタイプの研究者である。通俗的にマラソン型と言っても良い。ただし連続と言っても、数十年のスパンの中では1—2年程度の空白は問題にならないであろう。筆者も不肖ながら、基本的にこの範疇に括ってもらえそうである。ただし、継続自体は結構だが、惰性的になってしまっただけでは実質的進歩が無くなる。

一時集中型の研究者とは、人生のある時期だけ昌益思想と取り組んだのち、別の分野に研究対象を移したか、止めてしまったタイプの研究者である。この集中期に立派な業績を挙げた場合には、昌益分野から去った事を惜しまれる場合が多い。平林康之氏などがその典例であろうか。

中途休業型の研究者とは、若い時期に昌益を専攻した後、かなり長い期間（10年以上）昌益から遠ざかり、熟年になってまた取り組むといったタイプの研究者で、悪く言えばキセル型という事になる。空白期間が長かったために、その間の昌益研究の進展については、再開時に駆け足でフォローするので、重要事項や研究の進展過程には疎くなりがちである。それでも昌益研究に復帰したのは有意と言えよう。

前進後退型とは、職業学者に見られるタイプで、若い時期にかなりの研究業績を上げて学術研究職に就いたが、後半は昌益研究自体からは実質的に後退していくタイプである。教授職などに就き著名人化していくにつれ昌益思想の民衆性を称揚するのも負担に感じるようになり、消極化する場合が多い。

一点称揚型は、ある一点（例えば平等思想とか環境思想或いは自然観）に絞って昌益を特筆に値する人物として称揚し続ける研究者で、昌益の研究者と言うよりは自らの研究分野との関連で昌益をも取り上げる場合が多い。科学史の伊東俊太郎氏や比較思想・仏教哲学の中村 元氏がその典例と云えよう。

編集後記

★今号の半分は、昌益の自然思想が天地万物の実在世界を自律生生の運動の中で把握している内容を近代自然観との関係で、どう扱うかに費やしてしまった観がある。これは昌益に限らず漢字文化圏での自然概念の展開と近代西欧の自然概念とどう対応させるかの課題と重なっていて、すでに当編集者も何本かの論考を出してきた。その作業を通じて分かった事の一つに、1950年代にすでに複数の中国文学者によって、魏晋時代から自然の語義の一つとして天地を指す用法が現れていたという指摘があった。

ところが三枝博音氏が1958年に「自然」という呼び名の歴史—日本の思想文化の分析の試みの一つ」という論考を雑誌『思想』に発表し、日本では「天地や万物を指すときにあたっては、ついに「自然」ということばを使うことはなかった。」と断言した。中国で中世から自然=天地の語義が生まれれば、日本にも少なくとも一定の影響が考えられても良いと思われるが、三枝氏は上記の中国文学者の研究成果には何も触れることなく、このように論じた。いかに博学の三枝氏であっても、異なる学問分野の所論には無関心だったのか？ 氏の見解は現在まで半世紀以上にわたって通説として機能してきたが当編集者は不適切だと思う。本号にも再録したように、昌益は明確に自然の語義に天地も含めている。

★今号では他にもう一点、昌益の平和思想と直耕思想の成立に寄与した典籍として『六韜』の「文韜」と、西川如見の通俗本を集中的に取り上げた。いずれも2011年の拙著で論じた事項の補足的展開である。特に、昌益がなぜ「直耕」の用語を新たに提起したのかについては、これまで説得性のある解明を誰もなし得ていないと判断したので、自分自身の見解を提示させて貰った。しかし「直耕」の用語が作られる契機となるような先行典籍はこれだけとは限らず、もしかするとまだ他にもあるかかも知れない。此の件に関心のある方からの、別な新提起がでてくれば大変ありがたい。今号での提起がその呼び水になれば幸いである。当編集者は自説だけが唯一の妥当性を持つとは思っていない。

★今号では、山崎庸男氏の著書『安藤昌益の実像』（本年3月、農文協刊）への論評を行ったが、旧知の関係にある研究者の著作である上に、当編集者とは基本的スタンスの違いも感じられるため、論評はしにくく気の進まない作業であった。だが著者の多年にわたる研究の集約とも言える著書に対して、何も意見を述べなければ却って非礼になるとの思いから、敢えてワサビのような論評を試みた。

一方でほぼ同時にジャーナリスト・吉田徳壽氏の新著『安藤昌益の痛快漢字解—「私制字書巻」を楽しむ』が同じ農文協から刊行された。鋭くも軽妙な風趣の漂う時勢評論を兼ねた「昌益字書」の抄解であり、しかも大きな活字で印刷されているので、大変読みやすい。昌益の文字に対する基本観点を分かり易く解説した好著だと感じた。昌益全集で「私制字書巻」の基礎原稿を作成した石渡博明氏の序文も添えられていることから、本書の読者が更に「私制字書巻」そのものへと読み進められるように通路も用意されていると云えよう。安藤昌益の音韻言語論・文字文化批判の分野は、まだまだ継続的に取り組む研究者も少ないので、本書の刊行を機に、此の分野へ関心を寄せる人々が増える事を期待したい。

★本年6月から7月にかけて、参議院議員選挙と東京都知事選挙があった。参院選は改憲勢力が2/3を越えるのを阻止すべく野党共闘が成立し、東日本を中心にかなりの成果を収めることが出来たと云えよう。しかし改憲勢力が2/3に達したので、今後厳しい政治過程が見込まれる。民政党が伸びなかったのは同党内にも改憲派がいて、アベノミクスと真に対決し得ない曖昧さがある上に、民主党時代の失政から、国民の信頼が未だ回復できない事を示している。貧富格差の拡大・非正規労働者の増大・年金会計の市場投入分の増大損失など安倍政権の実態的行き詰まりは深刻であるにも拘わらず、巧妙な宣伝で危機が隠蔽され続けていると云えよう。「しっかりと取り組む」「丁寧に説明」という政界用語はごまかし行為と背中合わせになっていて、実に空しく感じられるのは当編集者の偏見であろうか。

(2016.08.04)

